

アートが、

暮らしのそばにある町へ

この町を歩き、この町で暮らし、

感じたことをカタチにする

町を訪れ、町に滞在し、人と出会い、その中で感じたことを作品として表現する――。

町では、アーティストが地域の中に入り込み、町の暮らしや風景から新たな表現を生み出す「アーティスト・イン・レジデンス事業」に取り組んでいます。



【写真：黒坂ひな】

本町では、芸術文化を特別なものとしてではなく、町の暮らしの中で身近に感じられるものにすることを目的に、「アーティスト・イン・レジデンス事業」に取り組んでいます。

アーティスト・イン・レジデンスとは、アーティストが一定期間その土地に滞在し、地域の人々との交流や、自然・暮らしに触れながら創作活動を行う取り組みです。完成した作品だけでなく、その土地で過ごし、感じ、考える過程そのものが、表現の一部となることが特徴です。

町ではこれまで、芸術文化の発信拠点として「あーとふる八頭」を整備するなど、芸術文化に触れる



機会づくりを進めてきました。

本事業は、そうした取り組みの中で、人と人との関わりや、町の暮らしそのものに目を向ける実践的な試みとして位置づけています。

本町の事業では、アーティストの滞在場所を町内の民家としています。地域の方との日常の会話や、何気ない風景との出会いが創作のきっかけとなり、町の中から表現が立ち上がっていきます。

今年度は、2組のアーティストが事業に参加し、町内の民家に順に滞在しています。

地域の方々との交流や、町の豊かな自然の中で感じたことをもとに、それぞれの視点で創作活動を行っています。



地域と出会い、関係が生まれた二週間

昨年度、八頭町で始まったアーティスト・イン・レジデンス

昨年度、町で初めて実施したアーティスト・イン・レジデンス事業には、家族3人のユニット「がかの家族」と、現代美術家の八幡亜樹さんと、2組のアーティストが参加しました。

2組はそれぞれ約2週間、八頭町新興寺の民家に滞在。地域の中で暮らしながら人と出会い、対話を重ね、その関わりの中で作品制作を行いました。

「がかの家族」は、滞在先の民家をカフェとしても利用できるスペースとして地域に開放。訪れた住民との会話や時間の共有を大切にしながら、少しずつ地域との関係を深めていきました。

家族それぞれが同じ風景を見つめ、描いた作品には、同じ場所から生まれたものであっても、視点や感じ方の違いが表現されていました。

一方、八幡さんは、一人暮らしの高齢者を訪ね、話を聞き、ともに時間を過ごす中で感じたことを、作品制作に反映しました。

また、町で知り合った住民とともに造形作品づくりにも挑戦。対話や手を動かす時間そのものが、制作の過程となり、人のそばで生まれる表現が形になっていきました。こうして制作された作品は、あーとふる八頭で展示され、事業の成果として紹介されました。



①



②



③



④



⑤

【写真①～⑤：田中良子】

地域とともにつくるアーティスト・イン・レジデンス事業

本事業をコーディネートする労働者協同組合 Barrier House Project YAZU (バリア ハウス プロジェクト ヤズ)の大崎さんは、初年度の取り組みを振り返り、次のように話していました。

「初めての取り組みでしたが、地域の方々が想像以上に創作に関わってくれたことが印象に残っています。町内を案内してくださる方や、制作拠点となった民家に何度も足を運ぶ方もおられ、アーティストの方が地域との関わりの中で多くのものを受け取っていたように感じました。民家をお借りして滞在したことで、地域との距離が近くなり、自然な交流や親密さが生まれたのではないかと思います。」

町を歩き、出会いを重ねるー

アーティスト・松橋さんの滞在制作 ー

今回のアーティスト・イン・レジデンス事業をきっかけに、松橋萌さんは初めて八頭町を訪れました。松橋さんは「アートとケアの結び目を散歩でつくる」をテーマに、各地で散歩会やケアにまつわる活動を行っているアーティストです。

町での滞在中、松橋さんは特定の場所にとどまるのではなく、町を歩き、人と出会い、時間をともに過ごすことを大切にしました。また、「よるべのない人々が、八頭町に集う」をテーマとしたプロジェクトに共感した参加者が、東京都や神奈川県からも集まりました。

松橋さんらは、地域の人に蟹鍋やジビエ鍋をふるまってもらい、食卓を囲みながらの会話や、町を歩きながら重ねた対話により、少しずつ交流の輪を広げていきました。立ち寄った場所で分けてもらった食材を使って料理を作ったり、地域の人と餅つきをしたり、雑煮会を開



①

松橋 萌(まっはし・もえ)

2025年、東京藝術大学大学院映像研究科修了。「アートとケアの結び目を散歩でつくる」をテーマに、散歩会や共同リサーチを通じた制作活動を行っている。

いてふるまうことで、日常の営みとともにする時間も生まれました。

松橋さんは、八頭町について「人々が寄り添い、生きていく中で、助け合えるあたたかいコミュニティがたくさんある町」だと感じています。

一方で、そのつながりは点在しているようにも見えました。町を歩き、さまざまな人と会うことで、その点をつなぎたい。そんな感覚が、今回の作品の出発点となっています。

家族ではない人と心地よい距離感で時間を過ごす。地域の人にとっては何気ない日常も、関わりが加わることで少し違った風景として立ち上がっていきます。人との出会いや交流の積み重ねが、どのような形となって現れていくのか。その過程が作品として立ち上がっていくことで、町の新たな魅力を見つめ直す手がかりにつながっていきます。



②



③

[写真①～③：黒坂ひな]



八頭町芸術文化交流プラザ「あーとふる八頭」

旧安部小学校を活用した「あーとふる八頭」は、八頭町の文化芸術を発信する拠点です。

館内には、八頭町名誉町民である版画家・橋本興家氏の作品展示や、世界的な天文家・本田實氏の偉業を紹介するコーナーのほか、町内で発掘された貴重な出土品などを常設展示しています。

また、約2か月ごとに展示替えを行い、企画展も開催。展示内容は「広報やず」のインフォメーションコーナーで随時お知らせしています。

町の歴史や人の営み、そして新たな表現に出会える場所として、ぜひお気軽にお立ち寄りください。

問い合わせ 芸術文化交流プラザ あーとふる八頭 ☎71-1016



「なんで？」から広がる表現

藤田クレアさんの滞在制作 —



①

藤田 クレア(ふじた・くれあ)

現代美術家。装置や有機物を用い、社会や人との関係の中で生まれる違和感や問いをもとに作品を制作。

主な個展に「ふとうめいな 繋がりに」(資生堂ギャラリー／2020年)など。



藤田さんの制作の出発点は、身近な「なんで？」という疑問です。たとえば、蜘蛛の巣が決まった枝にだけ張られるのはなぜなのか。

今回のアーティスト・イン・レジデンス事業を通して、藤田さんも八頭町を初めて訪れました。滞在中、藤田さんがまず印象に残ったのは「空気がきれいなこと」でした。かつて北京で暮らしていた時、空気がペットボトルで売られていたという経験から、きれいな空気は当たり前ではなく、大切な財産だと感じているといいます。「みなさん、深呼吸はしていますか？」という藤田さんの言葉には、日常の中で見過ごしがちな価値への気づきが込められています。

藤田クレアさんは、身の回りにある装置や有機物を用いながら、自身が生きる社会や人との関係の中で感じてきた違和感や問いを、作品として表現してきた現代美術家です。

藤田さんの制作の出発点は、身近な「なんで？」という疑問です。たとえば、蜘蛛の巣が決まった枝にだけ張られるのはなぜなのか。

町では、出前授業やワークショップを通じて、多様な視点や考えに触れながら制作を進めています。人とともに考えたことを立体作品として形にすることで、ものの見え方が変わる——。そんな体験を共有できる作品づくりに取り組んでいます。

その軌跡を金属でなぞり、形として立ち上げるなど、素朴な問いから作品を生み出してきました。現代アートは難しいと思われがちですが、藤田さん自身は「美しいと感じること」や「不思議だと思うこと」が、表現の入り口になればと考えています。



②



③



④

[写真①～④：田中良子]

活動の軌跡を紹介 アーティスト・イン・レジデンス事業 報告展示

町が昨年度から取り組んでいる「アーティスト・イン・レジデンス事業」では、今年度も2組のアーティストが、昨年12月から1月にかけて八頭町に滞在し、制作や交流を行いました。

展示会では、滞在期間中に生まれた作品や、町民との関わりの中で展開された活動の様子を、記録とあわせて紹介します。

期 間 2月12日(木)～3月8日(日)
会 場 芸術文化交流プラザ あーとふる八頭
問い合わせ 社会教育課 ☎84-1232

